



人と町との ふれあい

仲代氏との出会いから30年。
その月日から生まれたなじみの関係。

ロングラン公演の最中、仲代氏は若い塾生たちを連れて、能登演劇堂近くの中島商店街へ足を運んだ。道中、仲代氏は「無名塾と七尾の歴史はもう30年にもなる。これまでこの地域でたくさんの人たちに支えられた。七尾に住む皆さんからいただいた温かい心を、私たちは芝居で恩返ししなければならぬ。だから、無名塾の公演はここからスタートして全国へと行く。ここはわが城なんだよ」と塾生に言い聞かせた。

商店街に到着し顔なじみの人を見つけると仲代氏から名前を呼び、あいさつをして、世間話を始めた。「東京に住んでいる仲代さんから住民に声をかけて会話が始まるんですよ」と塾生に言い聞かせた。

次のあてがあるかのように仲代氏は通りを進んでいった。立ち止まったところは、ある酒屋。「こんにちは」と言いながら、奥へと進むと、その店の奥さんが出てきた。「あら、仲代さん。来れたら来ると言っ

てくれなあ、普段の格好やから困るがいねえ」と恥ずかしがりながらも柔和な笑みを浮かべた。昔、仲代さんや無名塾の皆さんと撮った写真やパネルを取りに戻り、若い塾生に当時の様子を話して話した。塾生は「先ほどの住民との雰囲気、次に歴史あるパネルや写真。ここは無名塾の原点なんだと感じました」。

仲代氏と私たちが出会ったきっかけ。それは、30年前に仲代氏が能登旅行に来て、こうつぶやいたことからだった。「小さな湾を挟んで向かい合うひなびた町。静かな内海に映える緑の山並み。静寂の中を、能登島に渡るボンボン船のエンジン音がこだまする。そこだけ別の時間が流れているような情景。この恵まれた自然の中で無名塾の芝居の稽古ができたかな」。

この言葉から私たちとの関係が始まり、これまでの無名塾と住民とのふれあいが続いている。



市民と劇団員の交流会

ロングラン公演のたびに開催されている市民と劇団員の交流会。食事やお酒などを飲みながら、親睦を図る目的で行われている。

今回は、中日の公演を終え、能登演劇堂の横にある「なかじま亭」に集まった。仲代達矢さんをはじめ、塾生やスタッフ、そしてボランティアなどで公演に関わる市民が参加。乾杯の発声が終わると、参加者たちは立場を気にせず、楽しく語り合った。

塾生からは「交流会と称し



た形式的な行事がよくありません。しかし、ここは違います。友人たちが集まる飲み会のように、気軽に楽しい時間が過ごせます。機会を作ってもらい、そして、こんな雰囲気、市民の皆さんと交流できることは私たちにとつて、ありがたいです」と、満面の笑みをみせた。

この交流会のスタイルは、ロングラン公演に関わる者同士が交流してきた歴史から生まれたものである。

公演中は「R&J」グッズをはじめ、七尾の特産品も販売していました。



能登演劇堂ロングラン公演では必ず製作され、好評を得ているオリジナルジャンパー。



能登産ブドウ使用のオリジナル赤ワイン。



ブルーに銀箔を押した上品な表紙が目引くオリジナルパンフレット。



パティエ工社博啓さんの洋菓子店「ル・ミュゼドゥ・アッシュ」が公演にあわせて記念ドーナツを発売。